

# 明治時代の鳥取―中央と地方の相克―

加藤 丈夫  
松岡 資明

○司会

これから対談「明治時代の鳥取―中央と地方の相克―」を始めたいと思います。先ほどご講演いただきました松岡様と加藤様には引き続きご参加いただきまして、新たに司会として鳥取県立公文書館の伊藤康専門員が参加させていただきます。それでは、これから進行を伊藤専門員にお任せしたいと思います。伊藤専門員、よろしくお願いします。

○伊藤

長時間、たいへん熱のこもったお話をしていただきました。ありがとうございます。この対談は四五分というところで考えていたのですが、残り二七分しかございませんので、限られた時間ですが、対談と会場の皆さんからのご意見をいただきながら、もう少し話を深めていきたいと思

ます。あと、対談ということですが、私はただ単に潤滑油的なところで、お二人は旧知の仲でございますので、ざつくばらんに話をしていただければと思います。

このテーマは相克ということですが、辞書を見ますと、相入れないものが互いに争うこととあります。加藤さんのお話の中で、中央政府（明治政府）の明確な目的の話が出てきたのですが、明治政府が国家を挙げて欧米と対峙していくのに対して、では地方はどうだったのか。中央政府から矢継ぎ早に出てくる指示の中で、ひょっとしたら地方というのは翻弄されているのではないだろうかと思うわけです。今回の企画展（「明治時代の鳥取県」）は、明治維新から大正改元まで、つまり四五五年間を俯瞰してみようということとで計画したのですが、明治政府が動く中で、鳥取とい

うのがその時代にどういうふうに向き合ってきたか、現在の鳥取を作り上げてきたのかということ、明治の四五年間に見ていくというような形で対談をさせていただきたいと、考えているわけです。

加藤さんからも少しございましたが、お二人に、午前中に私が解説を加えながら、展示をご覧いただいた訳ですが、その印象というか、こういう資料に興味があったとか、そういうことについて少しお話をさせていただければと思います。では、松岡さんの方から。

#### ○松岡

私が印象に残ったのは神社絵図です。これがいわゆる公文書であるかどうかよく分かりませんが、彩色もきれいで、しかも、全国的にも残っていないもので、京都と鳥取だけだというお話でした。こういうものがあることよって、やはり記録の厚みというか、そういうものがすごくよく分かるというのが印象的でした。公文書だけではなくて、公文書の周辺といえますか、関連する資料の大事さ、記録の大事さというものを感じました。

#### ○加藤

先ほどもお話ししたのですが、貴重な資料がよく整理されて、展示されているのに感心しました。中には国立公文書館が提供した資料がかなり入っていました。ただ、拝見し

てちょっと反省したのですが、我々が提供した資料というのは、今回はほとんどデジタル画像から複写されている。本物はもつときれないんです。次回開催されるときは、ぜひ国立公文書館から本物の資料を提供して、鳥取の資料と並べたいと思いました。これが第一の感想です。

もう一つ、今日の話にも関連するのですが、こちらでは、お話がありましたように、明治の初めからの四五年間を中心に据えた企画だったんですね。ただ、明治の初めのことを理解するというのは、やはり江戸時代の終わりに、鳥取県はどうだったのか、池田藩はどうだったのかということはある程度知って明治に入ると理解が深まるんですね。何か突然、明治の鳥取という違和感がある。ですから、先ほど、江戸時代の記録については博物館が担当していると伺いましたけれども、少し時代的に足を伸ばしてみられるといいなと、そんな感じがいたしました。

#### ○松岡

いや、全くそのとおりでと思いますね。私は昔、鉄の歴史について記事を書いたことがあるんですけど、例えば鉄の歴史も、「たたら」いわゆる砂鉄を使った鉄から鉄鉱石に移ってくるわけです。実は、たたら製鉄と同じようなやり方をしながら鉄鉱石を使った時代があるんですね。ごく一部の地域ですが、そういうものが意外と知られてない。こ

のつながりが本当はあるんだけど、そこはぶつんと切れちゃっている。そこが日本の歴史研究にとっては、大いに反省するところがあるのではないかなという気がします。

○伊藤

あえて反論はいたしませんので、肝に銘じて、明日に向かってやっていきたい、と思っております。

次は、「笑点」のお題みたいになってきましたが、今年が明治一五〇年ということですから、内閣官房に推進室が二年前だと思えますが発足して、そこを窓口には振りが行われた。行われていると言ったほうがいいのかもしれませんが、色々な企画、国の企画、国立公文書館もそうですが、国でも色々な企画があつて、あるいは都道府県でも色々な企画がある。一つ感じたのは、今年山口県の企画がすごい。参考までに、五〇年前に明治百年の式典をやった時、山口県はそう熱心ではないように思いました。ところが、今回はすごく熱心な感じがします。

そもそもこの明治一五〇年の動きというのは一体何だったのか。そのまさに最前線にいらっしゃるお二人なので、その辺を少し、辛口の言い方をいたしました、それに對して反論をいただければと思います。

○加藤

もう少し辛口で言いますと、実は、明治百年のときに比

べて、今回の取り組みは、国ではあまり派手にやらないようにということを取り組んでいます。むしろ、お祭り騒ぎはしないで、後に残る地道な活動を積み上げようというのが、国のこの企画に対する取り組みです。そういう点で、地方に散在している資料を発掘し、その資料のデジタル化をして記録として残す。どちらかといえばそういう地味な活動を積み上げていくというのが、趣旨なんです。山口県が盛んなのは、多分総理がいるからだろうと、それに尽きるのだらうと思えますけれども、今の動きはそういうことで、この一〇月に政府主催の式典がありますけれども、これも割合地味になるだらうと思えます。

○松岡

私はアドバイザーなんて偉いような顔をしてやっていすけれど、内閣官房で会議が何回かありまして、その中で、私以外の方は大学の先生なんですけれど。申し上げたのは、やはりこういうイベントはその年には「わあっ」となるんですが、大体一年とかそれで終わってしまうことが多いんですね。そうではなくて、逆に、これから始めるようにしたい。つまり、記録を残すということはこの一五〇年をきっかけとして始めて欲しい、というように申し上げております。ただ、それが本当にどこまで実現するかは分かりませんが、一応注文としてはそういうことをつけております。

### ○伊藤

私も今伺って、ああ、そうなんだと認識を新たにしたんですが、松岡さんがおっしゃった、記録を残すという言葉があつたんですが、神社絵図もそうですが、複雑な縁というのですか、奇跡的に残されてきて、鳥取県立公文書館にたまたまやってきた資料なんですね。この絵図は、国の神社政策を裏づけるものなので、公文書に類するものだと思っておりますが、やはり資料が色々な経過をたどりながら今日に残るとするのは、本当に奇跡的なところもある。

あと、これからの資料の残し方として、デジタル化というものが避けて通れない時代が来ているわけですが、その辺も含めて、歴史的な資料、そういうものを残す意義というものがどういったところにあるかというようなことについて、ちょっとお伺いしたいと思います。

### ○加藤

現在、デジタル化というのが大きく叫ばれていて、まずは、役所で作成する文書を最初から電子化する、もう紙は使わないで、クリックして決裁しなさいというわけです。そこから仕事を変えなきゃだめなんですね。今、アメリカは、二〇一九年から全て役所で紙はつかわないようにと決めています。これはオバマの時代に決めたものです。オーストラリアでも二〇二〇年から紙は使わない目標です。た

だ、日本の場合には紙文化がまだ生きていますし、中心ですから、その辺を切りかえるというのはすごく大きなことです。これは、日本語というもののハンディキャップかもしれないけれども、どうやって記録の最初から電子化するかということが、これからの大きな課題だと思います。

ただ、国立公文書館の仕事でいうと、紙は紙として、これは保存しなければだめなんですね。電子化したから原本は捨てちゃっていいというものではない。原本も残して、それを上手に使うために電子化する。そういう二本立てでやっていかなきゃいけない。だから、仕事は減らないんです。研究者の方が国立公文書館に来て研究しているのを見ていると、やはり紙の資料を請求される。紙をめくった時の手ざわりだとか、紙の厚さだとか、書いてある字の薄さだとか、そういうことから歴史的な事実を研究する。その役割というのはやっぱりすごく大事なんですね。ですから、デジタル化、デジタル化というけれども、それは二つの側面から考えなきゃだめだということを私は痛感しています。

### ○松岡

今の話にちょっと補足的にお話しさせていただきますと、いわゆる技術的にデジタル化した文書を長期に保存するということはまだ確立していないんですね。ですから、

五〇年とか一〇〇年のレベルではできるといふように言っている人もいますが、それを今の、例えば紙と同じぐらいのコストで本当にできるかというところ、まだ多分できていないし、そういう技術が近いうちに開発されるかというところ、多分難しい。極めて特殊な事例では、二億年保存できるとか、そういうものもあるんですが、それは極めてコストがかかる方法ですので、今と同じようなコストで本当に長期に保存できるかというところ、まだまだ時間がかかるというところだと思います。

○伊藤

国立公文書館では、紙資料の修復をされていると思いますが、その辺について、いかがでございますか。

○加藤

幸か不幸か日本は災害大国なので、傷んだ紙には不自由していない。現在、国立公文書館では約一〇人の専門家が、傷んだ紙資料を修復しているんですけども、この技術は世界一なんです。二年ほど前に韓国で公文書館の世界大会があった時に、傷んだ紙の修復技術のワークショップがあったんです。そうしたら、二千人くらいが集まった国際会議の中で、日本の修復技術のワークショップが一番人気でした。

今年に入ってから西日本で豪雨が。北海道でも

地震があった、豪雨は毎年起こるわけです。そうすると役所も水浸しになって大事な公文書が使えなくなっちゃう。国立公文書館では、色々な修復用の器材・道具を準備して、災害が発生したらすぐに駆けつけるといふ体制をとっているんです。そういう話を自慢げにしようと思いましたが、鳥取県立公文書館を拝見したら、応援の修復資料を用意されているというので、すごいな、進んでいるなと、こちらでもそういう修復体制を用意されているというのに感心しました。

○伊藤

残り時間がなくなってきました。歴史に学ぶという言葉がありますけれども、過去を好きで学ぶというのは大事なことだと思います。災害の歴史なんかそうだと思います。が、教訓というものが災害史の場合はあると思います。歴史を今の目線で見ると、例えば私たちが住んでいる鳥取とか鳥取県だとかを知るためには、歴史に学ぶということは非常に大切だと思います。松岡さんには、まだ鳥取との御縁の話をお聞きして、その辺も少し含めていただきながら、今まで鳥取県をどのようにご覧になっていたか、これからの鳥取はどうあるべきなのか、そういったことについて、最後に締めさせていただくような形でお話しただければと思います。

○松岡

私は新聞社の時代、一九九〇年からずっと文化部というところにおりまして、いわゆる公文書といえますか、アーカイブズのことをやり出すのは二〇〇〇年頃からなんです。それが、それ以前は考古学を主として取材をしておりまして。いわゆる古代、それからその前史の時代、縄文とか弥生とかそういう時代の話を取材していたんですが、何度か同じ遺跡で取材をさせていただいたのが妻木晩田遺跡です。その後に、青谷上寺地という有名な遺跡が出てきて大変な話題になりましたが、当時は妻木晩田が、大規模な高地性集落だということで大きく騒がれておりました。

確かに鳥取というと非常に小さいイメージがあります。県が小さいし、人口も少ないというイメージなんです。妻木晩田を見ていると何かちよつと違うようなイメージがあります。規模も大きくて見晴らしのいい、よい場所にあった遺跡だった、ということに記憶に残っております。

そういう歴史と今の鳥取とはつながっているという意識をやはり持つ必要があるのではないかと思います。先ほど鉄のお話をさせていただきましたけれども、やはり歴史というのはずつつながって、つまり、時を貫くという言葉が公文書管理法をつくる有識者会議の中で出ましたけれども、やはり時を貫くという意識が重要ではないかと思いま

す。ある行為があつて結果が生まれる。その繰り返して歴史が作られていくことを考えることが大事ではないか。あるとき突然「ぼん」と何かがやってきてできるものではない。やはり自分たちの歴史と文化が基礎にあつて、これからの将来といえますか、未来がつくられていく。

例えば兵庫県ですが、あそこは阪神・淡路大震災で大きな被害を受けました。一九九五年のことですから相当前になるんですが、今ここで何が行われているかといいますと、その時に色々な歴史資料を救出し目録を作つて残すというだけに終わつていないんですね。それをもとにして、各地域の色々な歴史・文化の研究をしていくということが震災以来ずっと続けられています。三〇ぐらいの地域で、地域の歴史を勉強するという継続した事業が進められています。中心になつているのは神戸大学ですが。そういう試みといえますか、チャレンジが実は東北大学でも行われつつあります。やはり自分たちが何でここにいるのか、つまり、先ほど加藤館長がアイデンティティーというお話をされましたけれども、やっぱりそれは歴史と文化に基づくものだと思うんですね。ですから、私自身が反省しているところなんです。歴史好きというところと戦国時代とか幕末ということになっちゃうんですが、やっぱり自分の住んでいる地域といえますか、その地域の歴史をもう一回ちゃ

んと振り返ってみるとというのが大事ではないかと思っております。

○加藤

私の父のふるさとが青森県で、今でも青森県の方とおつき合いすることが多いんですけれども、ある面で鳥取の方と共通するところがあります。鳥取の方とお話ししていると、大体自分のふるさとをよく言わない。どうですかというのと、人はすぐ出ていつちやうし、貧乏だしというように自分のところの悪口をよく言う。まともに受けるととんでもないことになりまして。実は奥底に持っている郷土を愛する気持ちというのは、ほかの土地の人よりもはるかに強いものを持っている。その持っているところと表面にあらわれるところに随分落差があるなというのが私の鳥取観なんです。

これからのことを考えますと、鳥取はもつと発信力を高めたほうがいいと思います。すぐれた自然がある、食材がある、それから江戸時代から続いている古い文化がある。江戸時代以前の、神話時代からの文化がある、そういうすぐれた文化の発信力というのをもつと強めていったほうがいいのではないかな。これからの時代に発展するためには、私はお一人お一人の発信力を含めて、地域全体としての発信力を高めていくことが大事だなと思えますし、先ほどい

らしていた今の知事は、ほかの知事に比べてはるかに発信力が豊かな方だから、ああいう発信力を大いに皆さんで盛り立てるのがいいな、そんな感じがしています。

○伊藤

ありがとうございます。とてもよいお話が続くんですが、残り時間わずかとなったので、お一人様限定で、ぜひお話ししたいことがあるという方に手を挙げていただきたいと思えます。いかがでしょうか。お一人様限定です。

どうぞ、はい。マイクを。

○会場

小山と申しますが、先生方の丁寧な説明、本当にありがとうございます。公文書館がない県が全国で九つもあるということ、そうした中で人口が一番少ない、財政規模の弱い鳥取県が持っているというのは誇りに思ったりするんですけれども、ふだん見えていて、少ない予算の中でよく頑張っているなと思うのですけれども、鳥取県の公文書館というのは中央から見るとどうなのか、全国の方から見てどのレベルにあるのかというのをわかったら教えていただけたらと思います。

○松岡

私は専門家ではありませんので、世間で色々な話を耳にして、それを発信しているわけですが、はつきり申し上げ

まして、鳥取の公文書館は非常に頑張っているらしいと、  
いうふうに見えると思います。詳しくは加藤館長のお話を。

(笑声)

○加藤

あんまり成績評価みたいなこと言うのは悪いんですが、  
規模とか管理レベルからいって、私は日本の中で中くらい  
というか、普通のところだろうというふうに思います。

ただ、さっき言ったように日本の公文書館の活動という  
のは、これは国全体もそうだし、たった七、八年の歴史し  
かないんですね。むしろこれからつくっていく話なんです。  
そのときに、やはり公文書館をいいものにできるかどうか  
というのは、まさに地域住民の力なんです。地域住民がそ  
のことに関心を持って、その活動を盛り上げるかどうかにか  
かっている。

私はそういう点で、最近の、もう少し鳥取よりは規模が大  
きいけれども、この近くの福井県文書館がすばらしい活  
動をしている。それはやっぱり福井県の地域の方たちとい  
うのが歴史に関心を持ち、公文書に関心を持ち、公文書の  
活動に対して色々な意見を繰り返している。そういうことが  
大事だし、こういう活動について。歴代の知事の活動もそ  
うですし、これから盛り上げていっていただきたいと思  
います。

○伊藤

どうもありがとうございます。最後のご質問は別に仕  
組まれたものではございません。率直に発信してくださっ  
て、どうもありがとうございました。

加藤さんには、福井県を紹介してくださって、さらに明  
日に向かってやっていきたい、と思っております。そうい  
う気力の湧く講演会であり、それを受けての対談になりま  
した。以上で、対談を終了したいと思います。どうもあり  
がとうございました。(拍手)

○司会

それでは、時間も参りましたので、記念講演会を閉会さ  
せていただきたいと思います。会場の皆様、お二人の先生  
方に改めて盛大な拍手お願いいたします。(拍手)

では、最後に、公文書館から会場の皆様にご案内を一言  
だけさせていただきます。講演の中で触れてもいただきま  
したが、現在、公文書館と県立図書館の二階で明治一五〇  
年特別企画展を開催しております。お配りした資料の中  
にもパンフレット入っております。会期は一〇月二三日火  
曜日までやっておりますけれども、本日も五時まで開館し  
ておりますので、ぜひお帰りの際にお立ち寄りいただきま  
すようお願いいたします。

それでは、長時間にわたりまして大変ありがとうございます

ました。お気をつけてお帰りくださいませ。ありがとうございます。  
ございました。(拍手)

明治一五〇年特別企画展記念講演会は、平成三〇年九月  
一五日にとりぎん文化会館を会場に開催した。